「近世の内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社の社殿拝領について」に対する討論

(岸 泰子著 日本建築学会計画系論文集, 第575号, 147-153, 2004年1月号掲載)

DISCUSSION ON RESEARCH ACTIVITY PUBLISHED AS “THE PRESENTATION OF THE IMPERIAL PALACE’S KARIDONO OF THE NAISHI-DOKORO AND KAMI-GORYO AND SHIMO-GORYO SHRINE IN THE EARLY MODERN PERIOD”

(Yasuko KISHI, J. Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No. 575, 147-153, Jan., 2004)

藤田 勝也*

Masaya FUJITA

The following three points should be discussed:

- 1) The relation to the master’s thesis written by myself
- 2) The honden of Fujinomori-jinja Shrine
- 3) The presentation of the karidono to Kaju-ji Temple

Keywords: naisi-dokoro, presentation, karidono, Fujinomori-jinja Shrine, Kaju-ji Temple

内侍所、下賜、仮殿、藤森神社、勸修寺

1 はじめに

筆者が内侍所の建築の研究に取り組み修士論文（以下「拙稿」と略す）としてまとめたのはちょうど20余年前で¹⁾、もとより不十分なものです。一部内容は本学会大会2編および本誌1編として公表し²⁾、後者はさらに補訂のうえ拙書に収載しました³⁾。内侍所の建築を単独で取り上げ詳細に検討を加えたのは、建築史学の分野では筆者（による拙稿およびこれをもとにした諸論）がおそらく最初で、その後の新たな研究を寡聞にして存じません。そのようなことから同じ内侍所の建築に関する研究が長い空白期を経て本誌に提示されたという事実にある種の感慨を抱きつつ貴論文を拝読しましたところ、拙稿とは主題は相違するとはいえ、研究の視点や史料引用とその解釈、整理の体裁など共通点があることに驚き、また内容等疑問に思う点もありますので、討論の場で明らかにすべきとの判断に筆者なりに至りました。ここでは紙幅の都合上、そのうち筆者の上記一連の研究に直接関わる箇所のみに限定したうえで、是非伺いたい点を以下に提示しますので、ご回答頂ければ幸甚に存じます。

2 疑問点

1) 拙稿が既往の研究成果として一切触れられていないのは、一体何故でしょうか。「既往の研究成果の適切なレビューがなされ、出典が明確に提示されて、それらと比較したうえで、新たな知見が提示されることが、論文の根幹であることは、いまさら言うまでもない」ことで、「一般的に、修士論文は、必ずしも閲覧ができるものではなく、外部への公表にも限界があるが、著者の倫理的な責任において既往の研究として明示すべきである」という本誌論文委員会の見解があります⁴⁾。にもかかわらず貴論文に拙稿は見えません。

さて、拙稿は内侍所の空間の変容をとりわけ古代・中世に重点をおいて論じたものですが、近世をも射程に入れることで変容の過程のいわば通史的な解明を目的としたものでもあります。貴論文が「戦国期から近世にかけての内侍所がどのような役割を果たす内裏建物であったかは、不明な点が多い」（148頁、左段、1～2行目）というのには同感ですが、しかしこの時期の内侍所の建築は拙稿でも検討し、前記の通り本学会大会でも一部概要報告しました（「宮中内侍所の成立について（その2）」、以下「大会報告」と略す）。具体的には拙稿第5章「内侍所の近世的展開」が貴論文と深く関連します。たとえばこの章の節項名を「第1節：近世期内侍所の信仰形態、第2節：平面の考察、同第1項：中井家文書にみる内侍所、同第2項：内部の装束、同第3項：近世における女官の候所、第3節：内侍所修理と仮殿造立、同第1項：古代・中世の内侍所修理、同第2項：修理時の仮殿造立、第4節：仮殿下賜について」の如く列記するだけでも、両者は相通じると感じるのはおそらく筆者だけではないはずです。ここでは論点を具体的にいくつか抽出して以下略記します。

まず貴論文第1章2節で、寛政度内侍所を事例に「仮殿は、本殿より小規模だが、構造・平面構成は本殿とほぼ等しい」（149頁、左段、4～5行目）というのは、拙稿（130頁）が「中井家文書」の指図をもとに概観し、貴論文註23が本殿規模をおもに同指図に依拠して示すのも、拙稿第5章第2節第1項が詳記し、また「表5-2 中井家文書にみえる内侍所」（142頁）にまとめています。さらに「室町時代から永正度内裏修理までは、造営と修理の場合とで対応が異なる」（149頁、左段、9～10行目）として仮皇居での内侍所造営と内侍所修理を分けて考察しますが、その時期設定はともかくこうした仕分けは大会報告の「15世紀仮皇居の内侍所」「修理時の仮殿造立」

* 福井大学工学部 助教授・工博

Assoc. Prof., Faculty of Engineering, Univ. of Fukui, Dr. Eng.

に通じるものです。さらにここで貴論文(149頁、左段、11行目～)が例示する仮皇居北小路第での造営は拙稿第3章第5節第3項「北小路第」に、修理については拙稿第5章第3節第1項に論じた部分があります。前者について拙稿は仮屋の2度の建立を指摘しますが、後者についてたとえば貴論文は永正17年(1520)の修理を記す『二水記』同年8月8日条を「興味深い」(149頁、左段、26行目)記事として引用し、「先例では修理のときには、神鏡を「別殿」に移すが、今回は人手も資金もないので、「同間の傍」に移すことになったという」(149頁、左段、30～31行目)と評するに対し、拙稿も同記事を引用のうへ「いつもなら、御殿の上を修理する時には、必ず神鏡は別の建物に移し奉るのに、このときは、内陣の傍に移動させただけで、ましてや、別に仮殿を造立して奉安するようなことはしていないのである」(129頁)の如くほぼ同じ評価をしています。なお帝国学士院編『皇室制度史 第5巻』1942年が内侍所の建築に関する史料検索において大きな役割を果たしたことは「結」(168～9頁)に明記しましたが、拙稿と貴論文の引用史料上の共通性は、拙稿が活用した同書を貴論文もまた参照したこと(註13)の反映とも推測されます。ただしそれが単なる偶然かどうか筆者にはわかりません。

次に、貴論文は第2章で仮殿造営による元禄以降の仮殿下賜を概観し、「表1 元禄度～慶応度の内侍所の造営・修理と仮殿下賜先」(149頁、右段下)を示します。しかし仮殿下賜の概要はすでに拙稿第5章第4節が検討、また「表5-3 内侍所仮殿下賜移建先一覧表」(143頁)としてまとめています。拙稿同表では下賜建物として仮皇居で造立された仮殿、本殿修理のために造立された仮殿に旧本殿を加え、また下賜先、典拠等を年次順に一覧しています。なお貴論文表1が示す内侍所の「造営・修理」は、拙稿では「表5-1 近世内侍所の作事経緯表」(140～141頁)として、より詳細にまとめていることを付言します。また表1に関連して、「その上、嘉永4年(1851)に土御門家に仮殿が拝領された際の記録である土御門晴雄『内侍所仮殿御寄付之記』には嘉永5年(1853)までの仮殿下賜先が一覧できる。(表1参照)」(150頁、左段、5～7行目)とし、宮内庁書陵部蔵の上記史料を示しますが、内侍所仮殿下賜に関する史料として拙稿がすでに注目し、前掲拙稿表5-3の作成でも活用、さらに第5章第4節で、これをもとに嘉永4～5年における土御門家への仮殿下賜の経緯を詳述(134～135頁)、加えて下賜の経緯を「表5-4 嘉永4～5年内侍所仮殿下賜経緯表」(144頁)にまとめています。

以上の如く貴論文のとくに第1、2章の叙述内容には拙稿と重複する箇所があるので、貴論文では拙稿を明示し、両者を比較対照したうえで新たな知見を提示するのが「著者の倫理的な責任」のはずです。拙稿については修士論文という性格から一般には周知されない面があるかもしれませんが、しかし内侍所を修士論文で取り上げたことは拙書「あとがき」に触れていて、外部への公表はなされているともいえ、しかも貴論文はこの拙書を註11に挙げています。

2) 貴論文第2章2節で「藤森社本殿は、宝暦5年(1755)造営の内侍所本殿を明和4年(1767)に拝領したものであるとされている」(151頁、左段、3～4行目)と記し、「藤田勝也他「京都市内近世神社建築に関する研究(1)——内侍所仮殿より転用された神社本殿について」『日本建築学会学術講演梗概集(北陸)』1983年9月。」と注記(註53)します。しかし副題の通り、この報告は藤森神社本殿を内侍所仮殿からの転用による遺構に、いくつかの疑問点を併記し

つつ推測したもので、真相はともかく、内侍所本殿の遺構に推測したものでは決してありません。本報告後、昭和59年京都市指定文化財となった本殿は、内侍所仮殿の遺構として紹介されています⁵⁾。従って「先例にない本殿の下賜についてはその背景等を十分考慮しなければならないことは、本章の分析から明らかである」(151頁、左段、6行目～)との主張は、筆者らの報告と関連付けてなされるものではないはずで、貴殿が上記の如く判断されるのは筆者らの報告のいかなる記述によるのかお伺いします。あるいは藤森神社本殿を内侍所本殿の遺構とする説が他にあるのでしたらお示し下さい。

3) 貴論文註64は「後水尾天皇が行なった門跡寺院の復興策の一環として寛文期の内侍所が勅修寺に下賜されている」とした後、筆者の報告「勅修寺の元禄復興とその建築」『日本建築学会近畿支部研究報告集』1985年5月を括弧書きで挙げ、この報告にあたれば「寛文期の内侍所が勅修寺に下賜されている」ことが確認できるかのよう

3 おわりに

拙稿の中世末～近世については本学会大会で概要報告するに留まり、いずれは補訂のうえまとめたいと思いつつ生来の怠惰からいわば〈封印・放置〉したまま時の経過に任せてきました。しかし一方で近年の中近世宮廷に関するとりわけ歴史学におけるめざましい進展は、当該期禁裏関係建物の再考の必要性を迫るに十分な状況にあることを痛感しています。そのような折から貴論文は拙稿のとくに近世以降の論点について再検討の必要性を喚起し、また自身の研究の検証と深化を怠り公表を先延ばしにしてきた研究姿勢を正す良い契機となりました。その点では貴論文に深謝したいと思います。拙稿(および「大会報告」等)には明らかな事実誤認や表現上の不手際など修正すべき点があり、今読み返しても赤面する他ありません。しかし繰り返になりますが、たとえそうであっても、またむしろそうであればなお一層のこと、既往研究として明示のうえ貴論文の見解を明らかにすることが、当該分野における今後の研究の進展のまずは前提であると筆者は考えます。拙稿にまったく触れず、あるいは黙殺されたかにもみえる貴論文に対しては、ただ当惑せざるを得ないというのが筆者の偽らざる実感です。以上、思い違いや的外れな表現等がありましたら、何卒ご海容下さい。

註 1)藤田勝也「古代・中世における宮中祭祀施設に関する研究」、京都大学修士論文、全169頁、1984年2月。2)藤田勝也「宮中内侍所の成立について」『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』1984年10月、同「宮中内侍所の成立について(その2)」『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』1985年10月。前者は古代～中世、後者はおもに中世末～近世における内侍所の実態について、註1拙稿をもとに報告したもの。藤田勝也「宮中内侍所の建築的展開——院政期貴族住宅における家政機関の空間に関する研究——」『日本建築学会計画系論文報告集』397号、1989年3月。3)藤田勝也『日本古代中世住宅史論』中央公論美術出版、2002年12月の第7章「宮中祭祀施設としての内侍所」。4)「佐渡、若狭能舞台の平面構成」の討論についての論文集委員会の見解。『日本建築学会計画系論文集』575号、2004年1月。5)京都市文化観光局文化財保護課編『京都市の文化財——京都市指定・登録文化財第二集——』、1985年3月、9頁。

(2004年1月29日原稿受理、2004年3月31日採用決定)